# 中央地区開催　市長と住民の「こんだん会」

～臥雲市長にアタック！地域の元気な声を届けよう～

| | | |
|---|---|---|
| 開　催： | 令和５年６月２８日（水）　　於　大手公民館大会議室　他 | |
| テーマ： | 「楽しもう!!地域づくり～老いも若きも参加して～」 | |
| 参加団体： | 中央地区町会連合会 | 会長　栗田　幸一　副会長　野村　長司<br>副会長　赤羽　郁夫 |
| | 中央地区子ども会育成会 | 会長　中田　充　副会長　原　綾<br>世話役　植田　幸恵、出井　知佳 |
| | 中央地区夏祭り実行委員会 | 事務局　川上　夏希、白澤　利基 |
| | 松本城・三の丸倶楽部 | 大宮　康宣　大宮　小依　長谷川　幸代<br>山田　智之　橘　由紀 |
| | 松本市 | 市長　お城まちなみ創造本部長 |
| 傍聴者： | ２２名 | |

## 1　こんだんの柱

⑴　中央地区こども会育成会・夏祭り実行委員会

「伝統行事を継承していくために」をテーマに、松本の伝統行事である青山様・ぼんぼんに焦点をあて、地区の現状と課題、それらの解決に向けた取り組みについて発表し、意見交換を行いました。

⑵　松本城・三の丸倶楽部

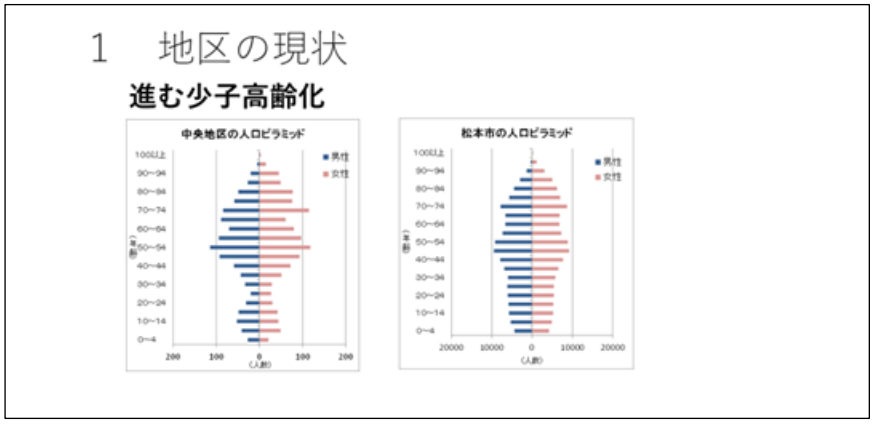
「松本城・三の丸倶楽部の活動と今後について」をテーマに、松本城三の丸エリアでのこれまでの活動と街づくりへの思い、今後の展望について発表し、意見交換を行いました。

## 2　こんだん詳細

⑴　「伝統行事を継承していくために」

（中央地区こども会育成会・夏祭り実行委員会）

初めに中央地区こども会育成会　中田会長が、中央地区の人口ピラミッドを示しながら、地区内の少子高齢化の状況とこども会の現状について説明しました。

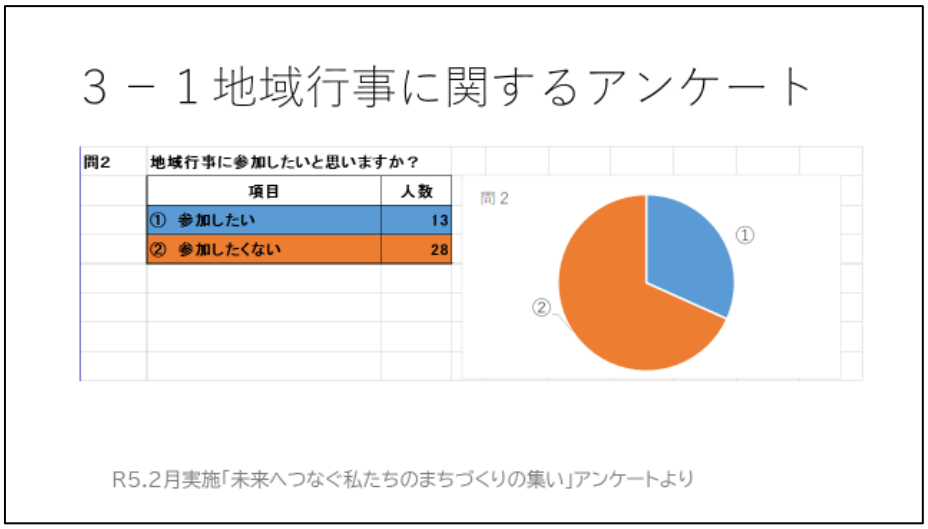


中央地区は松本市全体と比較して少子高齢化が進んでおり、育成会に参加する子どもの数もＲ４年８７名→Ｒ５年８１名と年々減少しています。

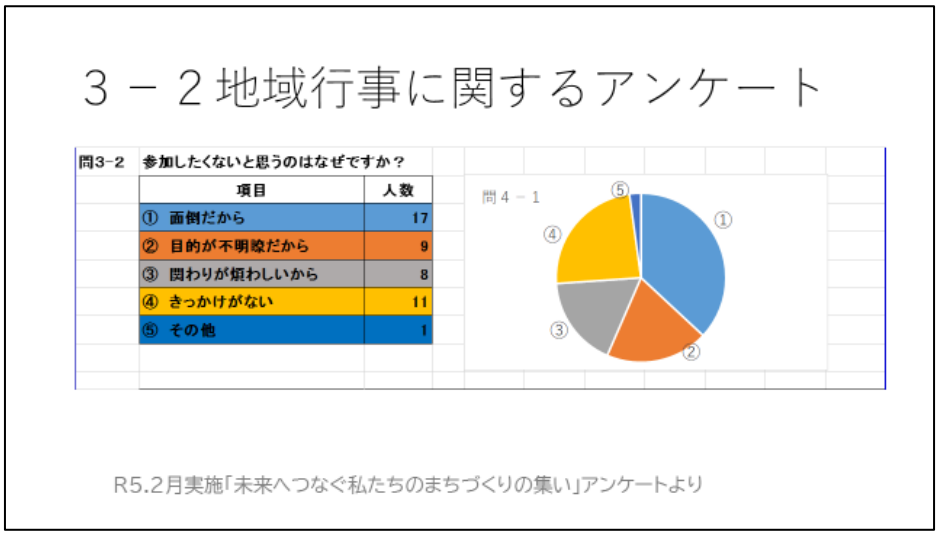
さらに中田会長からは、コロナによる３年間の活動自粛やＰＴＡ組織の弱体化等の影響で、保護者や子どもが地域行事に関わる機会が減ったことが行事への理解不足につながり、継続を難しくさせているとのお話がありました。

「松本城天守床磨きなど主要行事がコロナの影響で３年間実施できなかった。現在の６年生とその保護者は、行事の参加経験がほとんどない中での活動再開となる」と中田育成会長

また一方で「地区側も、これまでやることが当たり前だった青山様・ぼんぼんが途切れたことで、伝統行事の意味や由来、なぜ継続していかねばならないのかを改めて問われる状況となった。そのことに明確な答えがないまま再開するとやらされ感につながる」と中田会長。その具体的な根拠として、市が１０～３０代対象に行った地域行事に関するアンケート結果を示しました。



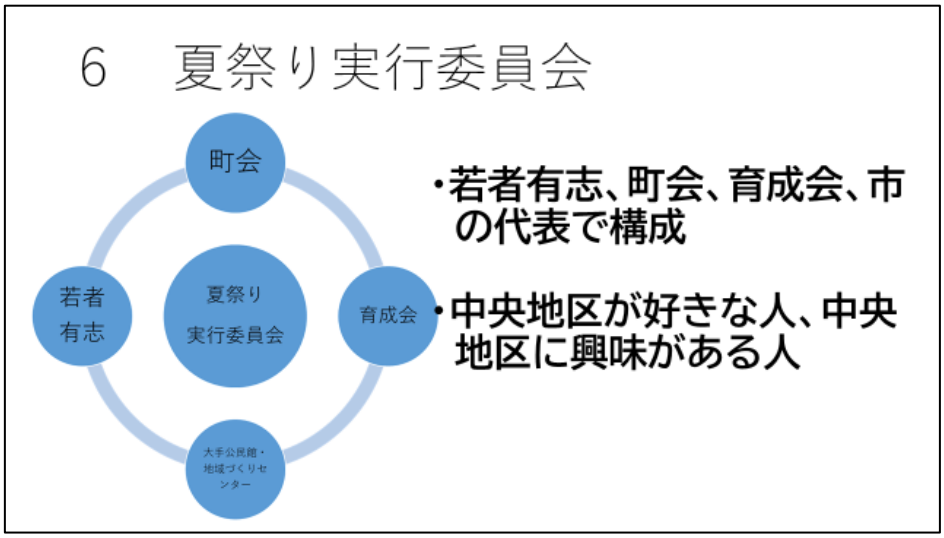

「地域行事に参加したくない」が全体の約68％




「面倒」「煩わしい」約54％ 「目的が不明確」「きっかけがない」が約43％となっている　※複数回答

上記のアンケート結果を受け、今年度中央地区では、青山様・ぼんぼんを地区の祭りとして開催することを決定し、実行委員会を立ち上げました。これまで育成会や町会等、一部の人たちだけの行事だった青山様・ぼんぼんを地区のお祭りとすることで、一般住民や学生、観光客等にも行事をＰＲし、かかわる人全員を巻き込んで伝統行事について考えていくことをねらいとしています。またこれまでの地区行事と異なる点は、地区の役員や町会等既存の組織が中心ではなく、企画運営を大学生等の若者に任せ、実行は住民や保護者、市など関係者みんなでという手法をとっていることです。今までのやり方や固定観念にとらわれず、「保護者が参加したくなるようなお祭りにする」ということを目標としています。

夏祭り実行委員会組織図




中田育成会長からのお話を受け、夏祭り実行委員会事務局の松本大学４年　川上さんから、中央地区夏祭りの説明がありました。

川上さんは、青山様・ぼんぼんと夏祭りを同時開催することで、子どもやお母さんたちが、やらされ感や強制ではなく、気軽に楽しく参加できるイベントにしたいと語りました。またその一方で、子どもたちが伝統行事の意味や由来を理解したうえで参加することが、今後伝統行事を継承していくための重要なポイントであるとして、学習会や歌の練習会を行う予定を話しました。

同じ実行委員会事務局の松大生白澤さんからは、今後の展望として、これまであまり地域行事に参加していなかった方も、今回の夏祭りをきっかけに地域を知ってもらい、楽しみながら参加してもらえるようになればとのお話がありました。

夏祭り実行委員会事務局　川上さん(左)と白澤さん(右)

発表を受け、懇談に入ります。

中央地区子ども会育成会副会長の原さんは、「コロナ下で地域のつながりが希薄となっている昨今、このような取り組みは保護者からしても非常にありがたい。共働き

が増え、夏休みなどの長期休暇はどうしても児童センターになってしまう。子どもたちの遊びもゲームばかりで、人との関りや地域活動をする機会が少なくなっている。こうした企画は大変だと思うが大事なことなので頑張ってやっていきたい」と語りました。

　同じく育成会相談役の植田さんからは、「昔は青山様ぼんぼんへの参加は、いい悪いでなく当然やることとなっていたが、最近では子ども会に入らない家庭もあり、行事へ参加する子どもが減っている。こうした企画はとても良いことだと思う」との意見がありました。

市長からは、「青山様ぼんぼんを今年復活させようとしている地区はいくつかあると聞いている。『企画は若者、実行はみんなで』という中央地区の取り組みを、他地区でもこんなやり方があるんだという一つのモデルになればよいと思う。そうは言っても子どもの数が減っている今、他地区の子どもたちも一緒に中央地区の夏祭りに参加してもらえるような取り組みをしてはどうか。例えばセンター同士で情報共有し、他の地区の子どもも青山様ぼんぼんに参加できれば全市に広がっていくのでは」との提案がありました。

地域代表の栗田町会連合会長は「この企画は、実は決まるまで様々な議論があった。しかし今回、我々は一歩引いて、企画は若者に任せようじゃないかとなった。私たちはこれまでずっと地域行事を担ってきており、青山様ぼんぼんも経験してきている。しかしそのやり方を若者に押し付けるのではなく、とりあえずお任せすることに決めた。中央地区を中心に徐々にこの動きを全市に広げていかれればよいと考えている」と語りました。

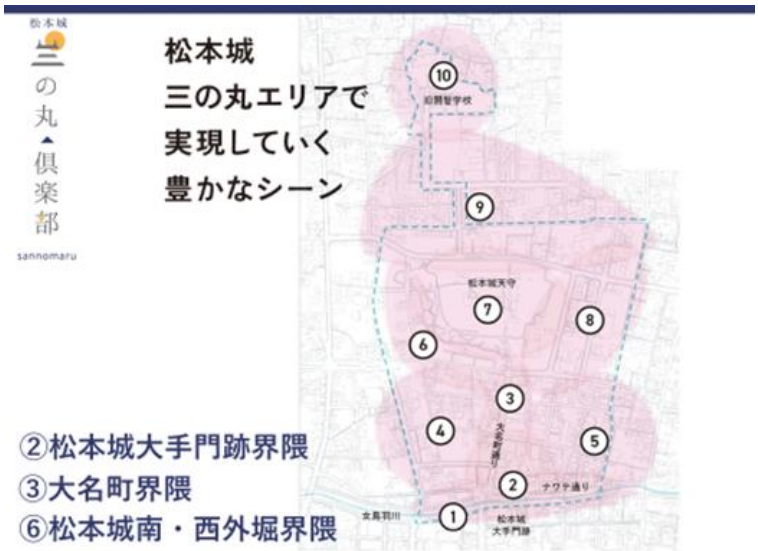
それを受けて市長からは「前回の島内での懇談会でも、これからは地区を超えて何かやっていきたいという話が出ていた。地区を超えるというのは隣接地区ということでなく、地域を飛び越えた住民が中央地区の夏祭りを体験することで、青山様ぼんぼんを全市的な大きな祭

りとしていけるのではないか」との意見が出されました。
中田育成会長は「夏祭りは今年度初めての試みのため、とりあえずは地区のお祭りとして実施するが、将来的には市長から提案があった他地区との連携もしていければよいと思う」とコメントしました。

⑵　「松本城・三の丸倶楽部の活動と今後について」
（松本城・三の丸倶楽部）
　三の丸倶楽部からは、ご自身も中央地区住民であり、大名町で販売業を営んでいる大宮康彦氏から、三の丸倶楽部の概要と取り組みについて説明がありました。

三の丸倶楽部　大宮さん（中）

「三の丸エリア」とは、松本城内だけでなく、松本城大手門、大名町、松本城南西外堀界隈を指します。今までは各町会ごとで活動していたところを、より広範囲に松本の魅力発信をしていきたいという思いで活動しています。主な活動場所としては、松本城南西外堀、メインストリートである大名町とその入り口にある大手門枡形跡広場となっています」と大宮さん。



三の丸エリアでの活動のテーマは、「THE SANNOMARU TERRACE プロジェクト」としてまとめられています。イベントを開催して盛り上げていくことはもちろん、地元に暮らす自分たちがこのまちをどうしていきたいかということを大切に活動しているとのことでした。

さらに大宮さんからは、2016年の大名町通りでのマルシェ開催、また同年1月の氷彫フェスティバルに合わせたアイスバー、桜の季節の夜桜バーの様子をご紹介いただきました。いずれも来場者に好評で、賑わい創出に寄与することができたそうです。「中央地区のスローガンにもあるとおり、自分たちも一緒に楽しむというつもりでやっている」と大宮さん。

続いて市の「三の丸エリアプラットフォーム」事業についての説明をしていただきました。三の丸エリアプラットフォームとは、三の丸倶楽部さんをはじめとするいくつかの団体が、三の丸エリアの10の界隈単位での賑わい創出を目的として専門家の助言や市等の財政支援を受けながら取り組んでいる事業です。三の丸倶楽部さんは、令和7年度以降は行政からの財政支援なしで自分たちだけで運営していくことを目標に活動されているそうです。

次に三の丸倶楽部さんの主な取り組みとして、ひと時の空間づくりの紹介がありました。「THE SANNOMARU TERRACE プロジェクト」と題するプロジェクトの中の一つに、大名町通りのベンチ設置があります。これは道路活用の取り組みの一環で、三の丸倶楽部さんの費用負担で地元の方たちの協力を得ながら作成し設置したそうです。ベンチは設置場所の近隣のお店がそれぞれ管理しています。

大名町は300メートルほどの距離がありながらなかなか立ち止まることがなく通り過ぎてしまうため、ベンチで休みながら街の様子を眺めたり、家族や友人とおしゃべりしたりする空間として使用し、街をいつもと違う角度で眺めてほしいという思いから実現したものです。この取り組みは2年前から実施しており、今後はこの2年間で見えてきた課題を検証し、どうブラッシュアップしていくかを話し合っていく予定である、と大宮さん。

大名町のベンチで休む人たち

　また他にも、現在工事中の外堀大通りが今年10月に完成予定ですが、その歩道を活用したイベントを企画しており、その準備としてベンチ設置、キッチンカー導入を試験的に行ったところ、大勢の来場があったそうです。今後も歩道の広さを生かす様々な活用方法を模索していきたいとのことでした。

　さらにもう一つの取り組みとして、枡形跡ひろばの活用方法があります。三の丸倶楽部さんは、ひろばにテントを張り、日陰をつくって通行人に休んでもらうという取り組みを計画しているとのことでした。

　現在取り組んでいる最も大きなプロジェクトが、大名町の道路再整備です。これは大名町の道路をよくしていくため、住民が中心となった委員会で取り組んでいるものです。市にお任せではなく自分たちもまちづくりを考えていきたいという思いから、市と一緒に道路の再整備を進めていくことを目的としています。大名町の歩道は50年が経過し損傷も激しく、整備が必要ですが、すぐに思うようにいかないのが現状です。そこで住民たちが街路灯にフラッグをつけたりと何とか工夫をする中、三の丸倶楽部さんも協力しているとのことでした。

大名町通りで作業する人々

発表を受け、懇談に入ります。
町会連合会の赤羽副会長からは、「これまであまり三の丸倶楽部さんの活動報告を聞いたことがなかったが、協力できることはしていきたいと思う」との発言がありました。また栗田町会連合会長は「自分は近隣町会なのでこのような活動は承知していた。非常に素晴らしいと思う。提案だが、現在の観光というと買い物をして終わっているようだが、できれば体験型の観光を三の丸倶楽部さんで考えてもらえるとありがたい」との提案がありました。

大学生の川上さんは「市外出身なので、このような活動をしている団体があることを知らなかった。発表の中で日常を感じ取るという表現があったが、単にイベントをやるだけでなく、日常を垣間見る体験を提供したいという目的があることは素敵だと思った。自分はスマホやナビを見ながら街を歩くことが多いが、街中で立ち止まると人や建物などの風景に気づくことがあると思う。今度ベンチがあったら座らせてほしい」
同じく大学生の白澤さんからは「ベンチを置くことで、観光客だけでなく、地域の住民も改めて街を見直すことができるのは良いことだと思う」とそれぞれ感想を語りました。

育成会の出井さんは「大名町通りを通るとベンチに座る方を毎日のように見かける。コロナで色々と制限されたりということもあったが、このような活動はとてもいいこと」
同じく育成会の植田さんは「ベンチは住民が作った思い入れのあるもので、自分の店の前にも設置されている。自分のお店のお客ではなくてもそのベンチに座っている子どもさんたちを見ると微笑ましい。先ほど栗田会長から体験型の観光を考えてほしいという提案があったが、新博物館も完成するということで、そこで何かできたらよいのでは」というご意見がありました。

また三の丸倶楽部会員で、大名町で喫茶店を経営する長谷川さんからは、「三の丸エリアビジョンというと観光というイメージになりがちだが、実際には地元の子どもやお年寄りが暮らしている。観光客から住民まで幅広い人たちが利用する地域だけに、どこかに特化するのでなく、みんなにとって良い空間づくりを進めていくにはどうしたらよいのか考えていきたい」とのお話がありました。

最後に市長から「三の丸倶楽部さんは、その地域の住民ではないがそこに働きにきているような人たちが、松本の将来を考えるという新しい枠組みのモデルだと拝見した。先ほど中田育成会長からこの地区の10代、20代の若者が減っているというお話があったが、実は三の丸倶楽部さんのような形で地域にかかわっている人もいるため、必ずしも減っているわけではない。このような形は他の中心市街地へも広がっていけばよいと考えている。特に中央地区で行っているベンチ設置のような活動は、三の丸倶楽部以外の人たちとも協力してぜひ全市的に取り組んでほしい。5月以降、ベンチに座っている家族連れのような人たちを多く見かけるようになった。外堀大通りもぜひステージとして活用してほしい。
事業を行う中で様々な課題はあるかと思うが、市も含め住民とも連携し、魅力的な空間づくりを行っていただきたい」とコメントがありました。

## ３　まとめ

今回の懇談会で、同じ地域で地域を良くしたいと活動する人たちが一堂に会し、顔を見て話をすることで、お互いに理解を深め、新たな発見をすることができました。

出席者からは、「これまであまり交流がなかった地元の方の活動や、どんな風に感じているのかを知ることができて良かった。これからもこのような機会があれば参加したいと思う」というご感想をいただきました。

懇談会終了後は講座室で臨時居酒屋公民館が開店し、来場者の方たちが懇談会の感想を話し合ったり、地域の課題を議論したりと、思い思いに楽しんでいました。

この会を機会に、地域づくりを楽しむ人たちの輪が中央地区から全市に広がっていくことを願います。

（了）